

# 米 土門



土門 剛 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

「おいしいですよ」とアドバイスしてくれていたからだ。冷めたご飯をレンジでチンして試食したところ、「冷めても、さほど食味が落ちないな」と納得した。

## 宇都宮大学が開発 コシヒカリに勝る特性

あらためて「ゆうだい21」って、なんじゃい。そう思ってネットで調べてみた。まず名前の由来。あらかじめ仲間から、宇都宮大学で育種した新品種という説明を聞かされていたが、てっきり開発コードのようなものと思っていたら、正式な品種登録名だった。

「ゆうだい」は、規模が大きく堂々としている「雄大」という意味ではなく、宇都宮大学のローマ字表記でのイニシャルである。「21」は、同大学の試験田で両親不明の突然変異種として見つけたのが2000年という節目の年だったので、21世紀をイメージするようネーミングしたらいい。

大学の研究室でスタッフがコップ酒でも飲みながら考えついたのかと思ひ、スタッフに聞いてみた。

「前田先生の一存で決まりました。宇都宮大学は、地元では『宇大（うだい）』と呼ばれています（それがローマ字表記のイニシャルUをユーと読み、『ゆうだい』としました。『ゆうだい』は文字どおり、雄大のイメージを伝えるためでした。先生は、稲の姿、穂の大きさから、そうネーミングされたようです」

品種特性については、その名のとおり、ひととき見栄えのする稲姿、コシヒカリ並みの食味、何よりも冷めても食味が落ちないというのが最大公約数的見解だ。ただその稲姿から、短稈種のような耐倒伏性を期待するには、それ相応の技術的対応が求められるが、これはさほど難しくないというのが、関係者の話。

■ 詳しい品種情報は宇都宮大学のホームページから引用しておく。

出穂はコシヒカリより2、3日遅い早生種で、5月中旬の移植では8月10日前後の出穂となる。コシヒカリに比べ以下のような生育・収量面での特徴がある。稈長は5〜10cm高く、1mを超える。穂長は22〜25cmで3〜5cm程度長い。1穂粉数は130〜150粒程度でコシヒカリの90粒前後に対して明らかに多く、大きな草姿と穂に外観上の特徴がある。分けつ性は同様の中間型であり、

仲間が送ってくれた「ゆうだい21」という品種のコメを初めて試食したのは、昨年のこと。食味の評価を聞かせてほしいということを送ってこられた。

我が家族4人は関西で育ったこと也有着、全員が粘り気のあるコシヒカリ党だ。その次に好きな品種は「ひとめぼれ」。こちらは逆にコシヒカリのような粘り気はないが、その控えめな点が入っている。食べ飽きない点、「ひとめぼれ」の大

きな特徴かもしれない。

新しい品種を食味比較する際は、たいいていコシヒカリを基準にする。うまみや粘り気はどうか。これをポイントにする。家族がそろった夕食で試したところ、家族全員、「これ、おいしいね」と顔を見合わせた。コシヒカリ並みのうまみ、粘り気があったのだ。

次いで冷めてからの食味。夕食のために炊飯したものを、翌朝の朝食で食べた。仲間が、「これ、冷めて

## 注目を集める新品種米「ゆうだい21」

## 正当な市場評価を得るためにやるべきこと

最高茎数は同程度であるが有効茎歩合がやや低い。そのため、穂数はやや少なくなり、結果的に単位面積当たりの穂数はほぼ同程度になる。

玄米千粒重は22g前後で同程度である。粒形が長粒気味であるために、同じ粒厚選別基準では屑米の発生比率が高い。また登熟歩合も低い。そのためコシヒカリより収量は3〜4%ほど低い。耐倒伏性はコシヒカリよりやや強い程度であり、特に強くはない。長稈品種であるため多肥栽培をするとなびき倒伏を招きやすく、挫折型の倒伏発生は少ないが、受光態勢が悪化するために収量低下につながりやすい。

玄米外観品質は近年のような高温条件下でも乳白米等の発生が少なく、品質が低下しにくい特徴がある。また食味は特有の粘りがあり、また甘みと硬さも適度で明らかに優れている。いもち病は葉いもち、穂いもち共にやや強く、穂いもちへの移行が少ない特徴がある。

この品種特性は、栃木県芳賀農業振興事務所が、15年産で実施した試験栽培でほぼ裏付けられた。同年11月に公表した「平成27年度『ゆうだい21』調査圃成績書」が、それ。同事務所が試験のために使った圃場は、「ゆうだい21」を生み出した宇

都宮大学農学部の子供近く。芳賀町と一貝町にある3圃場だ。

## 「ゆうだい21」販売第一幕

地元・栃木県が公式栽培試験に踏み切るのは、10年の品種登録から5年目。そのきっかけは、コンビニエンスストア大手のセブンイレブンやローソンの動きだった。冷めても食味が落ちないという「ゆうだい21」の特性に、「おにぎり100円競争」でしのぎを削るコンビニ大手が着目したようだ。

最初に動いたのは、ローソン。14年11月、コメ卸国内最大手の神明ホールディング（HD）と宇都宮大学の3者で連携協定が締結される。「ゆうだい21」の活用と普及を目的に、3者がそれぞれ次の役割分担で連携することを決めた。

【宇都宮大学】種子生産に関わる原種・原原種の品質維持並びに安定供給に努める。

【ローソン】店舗での販売拡大、認知度向上に努める。

【神明HD】グループ会社を通じ、生産者確保、確実な集荷、安心・安全な精米加工を行なう。

この連携協定では、産地に合わせた栽培技術の確立が抜け落ちている。これを担うとしたら、集荷の役割を

担う神明HDだろう。確実な集荷のためには、生産者を確保しておくことが大前提。それには栽培技術を確立しておくことだが、残念ながら神明HDにはその能力がない。

それを裏付ける面白い資料を見つけた。「ゆうだい21」を茨城県で普及すべく、神明HDが同県での産地品種銘柄の申請を出した際、農水省関東農政局から受けたヒヤリングのやりとりだ。

14年12月、水戸市で開かれた茨城県産農産物の銘柄設定等意見聴取会のことだった。神明HDは申請者としての出席。「茨城県産ゆうだい21」の銘柄設定を申請するためだった。ヒヤリングを受けたのは神明HDの三枝俊幸課長。質問したのは同農政局生産部生産振興課の相澤努検査技術指導官で、座長として意見聴取会をとりまとめていた。

座長「神明様に伺いますが、（平成）24、25年の現物は見ているでしょうか」

申請者「見ておりません」  
座長「農産物検査は受けていないということでしょうか」

申請者「我々の知らないところで受けられており、だから我々が知らないと言うことです」

座長「受けたか、受けないかもわ

からないと言うことですか」  
申請者「作っておられる方はいらっしゃいますので、受けているのかなと思いますが、我々は受けているか受けていないかわかりません」

その場には、神明アグリイノベーション・東日本営業チームリーダーの岡見常幸常務取締役も同席していた。会社を上げて「ゆうだい21」に取り組んでいる姿が浮かび上がってくる。まことにありがたいことである。関東農政局の話では、コメ卸がこのような形で産地品種銘柄の申請を出してくるのは初めてとのこと。現物も見ず、県内の生産事情も把握せずに申請を出して、農政局の質問にしろもどろというのは愛敬というほかないが、さすが日本一のコメ卸の目利きである。「ゆうだい21」の実力を示すエピソードもいえる。

九州で耳にした神明の買値は、1万2500円。同県産ヒノヒカリの概算金より200円高かったが、神明の技術指導もなかったため減収となり、トータルでは、ヒノヒカリを下回るようになったという。

神明HDの動きは、ライバル・木徳神糧の動きに触発されたことだった。14年7月14日付け日本経済新聞が、「セブン向けコメ新品種を直接調達 木徳神糧」と報じている。

宇都宮大学と木徳神糧によるコンソーシアム（事業共同体）を立ち上げたことを示す記事。

「木徳神糧は宇都宮大学が独自に開発した品種『ゆうだい21』をセブンイレブン向けに供給する。（中略）栃木県の農家とゆうだい21の栽培契約を結び、セブンイレブンの取引業者が食材を共同購入するための組織『日本デリカフーズ協同組合』に販売する。今秋収穫の新米から10トン規模で試験的に取り扱いを開始する。5年後に500トンに増やす計画だ。約200軒の農家の参加を目指している」

木徳神糧の動きに神明HDは相当焦ったらしい。木徳神糧が栃木を拠点に集荷する方針を打ち出していたので、神明HDは隣の茨城県を集荷の拠点にしてきたのだ。その裏には、買い手のローンからの強い要請があったと見られる。

宇都宮大学による「ゆうだい21」の種籾生産は、順調に拡大しているようだ。大学農学部は資料の提示を求めたが、外部には公表していないという理由で断わられた。

## 辛門

全国大学付属農場協議会が15年3月に公表した資料には、「ゆうだい21の取扱

い計画数量に関しては、平成26年産米50玄米トン、平成27年産2000玄米トン（予定）を目標に積極的に活動することを表明しました」という記述がある。実際に増えたのは、各地生産者のヒヤリングから判断すると数倍程度だろう。当初計画の40倍に増やすとしたら、神明は熊本のプロデューサーに提示したライバルとなる同等品種米（熊本ではヒノヒカリ）並みの価格を提示してやることだろう。

## まだ言葉だけが踊る コンソーシアム

最近、「ゆうだい21」に新たなブームが起きている。各地で「ゆうだい21」の作付けに興味を抱く生産者が急増。販売力のある生産者が、商品力強化の一環として「ゆうだい21」の可能性に着目したのだ。筆者が「ゆうだい21」を紹介したところ、すでに20名以上の生産者が宇都宮大学農学部で種籾の注文を出したという。

販売先をコンビニに限定した木徳神糧や神明HDを通じた集荷は、買い取り価格がどうしても低めになりやすい。農家の不満も、その買い値にあるのだろう。このルートだけに依存すると、せつかくの「ゆうだい21」も失速しかねない。

「ゆうだい21」の市場における正当な評価を見極めるには、木徳神糧や

神明HDに出荷しない生産者にも多数参入してもらえない。そのほうが、集荷サイドの神明や木徳神糧にもプラスになる。一方的に買い手の意向を反映した値を示すと、その値段に生産者が疑心暗鬼となり、お互いに信頼を損ねてしまう恐れがある。

それともうひとつ大切なことがある。産地に応じた栽培方法の確立だ。宇都宮大学が開発した品種だけに、地元・栃木の栽培方法は確立しているが、他の地域では栽培マニュアルがないに等しい。

神明HD、ローン、宇都宮大学の連携協定でも、肝心の栽培マニュアルの確立という項目が抜け落ちていくことは先に指摘した。誰の役割かということになれば、集荷を担う神明HDではないか。同じことは、木徳神糧にも指摘できる。大学は、種子生産にかかわる原種・原原種の品質維持並びに安定供給に努めることで精一杯。そんな予算などない。

連携協定やコンソーシアム。言葉だけが踊っているように思えてならない。コメ卸のツートップだけに、それに相応しい企業としての役割を果たしてほしい。コンビニが安い価格で調達したい気持ちがよくわかる。それが度を過ぎると、新品種の開発意欲も萎え、ひいては自分たち

の信用にも影響を及ぼしていくことを肝に銘じるべきだ。

最後に、「ゆうだい21」の開発者、前田忠信名誉教授のことに触れて、この稿を終えたい。ネットで見つけたプロフィールには、1943年生まれ、都立高校卒業後2年間の会社勤めの後、宇都宮大学農学部農学科に入学。卒業後は、農水省東北農業試験場に勤務した後、21年同大助手に採用され、助教を経て、2002年教授に就任。同年に「黒ぼく水田における低投入持続型栽培水稻の収量性」で農学博士号を取得。08年に同大を退職して名誉教授。

品種開発は、地道に交配を重ねたり、変異種を見つけたりする息の長い仕事。派手さは一切ない。優良品種を開発しても、世間で評価されるには、10年や20年単位の長い期間を要する。前田名誉教授は、この地道な仕事を黙々と続けてこられた。「ゆうだい21」は、1990年に同大付属農場でひときわ大きな穂を持つ株を見つけたことから始まった。品種登録を受けるまでに20年の期間を要している。

前田名誉教授の努力に報いるのに、「ゆうだい21」に市場での正当な評価を与えてやるということとは、誰も異論のないことだと思ふ。